

雲部車塚古墳概説(2)

篠山市 水井 康宏

出土遺物

竪穴式石室内からは、数々の遺物を取り出されました(表1)が、数点を残し石室内に戻しています。現在、地元は何点か残し(所在不明)、京都大学に車塚の遺物は保管されています。しかし、遺物の種類や数は、試掘当時の記録と近年整理されたもの(表2)とは若干異なるようです。

藤田和尊氏は、車塚の甲冑の保有形態(短甲・青・頸甲^{あかへんがい}の3点セット)を合の岡パターン⁽¹⁾⁽²⁾に分類されています。そして、中期中・後葉において「伝統的な在地勢力に対抗するために配置され」、

「甲冑集中管理体制の在地化を物語る」ものとし、「百舌鳥・古市古墳群の被葬者たちの、武力による直接的な地方経営の開始を示唆するもの」と考えられています。

表1 出土遺物一覧

出土遺物名	A数	B数	C数
刀	3 4	3 1	3
劔	8	4	4
鉾	2		1
鎧	4	2	2
鎧	5	4	1
矢	1 0 7	1 0 0	7
刀掛			2
長穗			2
石			2

(出土遺物名は当時の記録のママ)

A数 = 取り出した数

B数 = 石室に戻した数

C数 = 京都大学に移管した数

空白 = 不明

刀 : 4尺 0寸 6分 (123.0cm)
刀 : 2尺 0寸 3分 (61.6cm)
刀 : 3尺 7寸 3分 (113.0cm)
劔 : 2尺 3寸 4分 (71.0cm)
劔 : 2尺 0寸 8分 (63.0cm)
劔 : 2尺 1寸 8分 (66.1cm)
劔 : 1尺 2寸 9分 (39.1cm)
鉾 : 6尺 8寸 5分 (207.6cm) [206.0cm]

[]内数値は『王者の武装』より

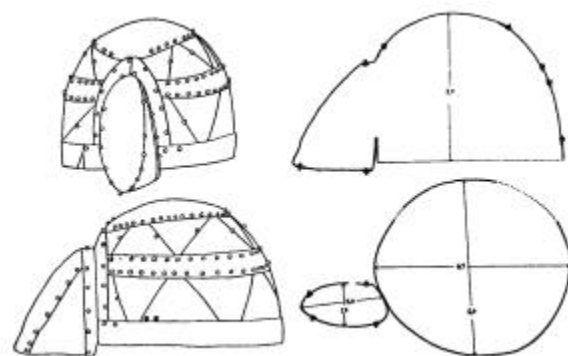


図3 雲部車塚古墳出土 三角板鉾留衝角付青

車塚出土の三角板鉾留衝角付青の形状は、他に類例がありません(図3)。そのことから、「異形」という文字が付け加えられ、しばしば三角板鉾留異形衝角付青と称されます。

通常の衝角付青の衝角部は、伏板の一部が前面に延び、稜角をなしています(図4)。しかし車塚のそれは、伏板が前面の衝角部に延びず、平面U字形の連接板によって、側面三角状の衝角部を突出させています。また、衝角

表2 京都大学保管遺物一覧

出土遺物名	C数
刀	3
劔	4
矛	3
鉄鉾	4
小札	1
三角板鉾留異形衝角付青	1
衝角付青伏板	1
短甲後胴押付板	1
短甲後胴裾板	1
短甲左前胴押付板	1
不明鉄板	1
頸甲	1
三角板鉾留鉾	1
板鉾	3
馬具	2
?	2
石	2

鉄鉾(矢尻) 7の内 3は別製品



図5 雲部車塚古墳出土
三角板鉄留衝角付胄の鉄

いのかも知れませんが、
5) 実戦的でないとするれば、導入期における試作品的要素が強いのかも知れません。
鉄留導入期には、鉄頭が円錐形で、鉄を密に打っているという特色があります。⁽⁴⁾この胄にもその特色をみることができます(図5)。実戦的でないとするれば、導入期における試作品的要素が強いのかも知れませんが、

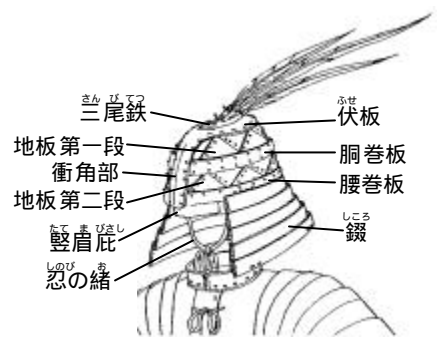


図4 胄の各名称

部の内部は、鉢とは独立した空洞になっていきます(高さ15・15センチ、鉢の左右18・18センチ、前後20センチ、衝角状突起幅4・5センチ、長さ9・9センチ)。⁽¹³⁾
これだけ突出すると、装着時に前方に傾くのではないかと思いますが、頭部によって半球面をささえること、⁽¹⁴⁾鉄を取り付けることによって前後のバランスが保たれる

2 折り釘

扁平な割石を小口積みにした竪穴式石室の四方の側面には、鉤状の鉄釘が打ちつけられています。これも国内では類例がありません。八木獎三郎氏は、「四方には二行に四本宛の刀剣を懸け、鉄の折釘を以て支えたりと云えば」と報告しています。⁽⁵⁾しかし古図では、無数の打ち釘が描かれており(図7)、八木氏の報告とは異なります。

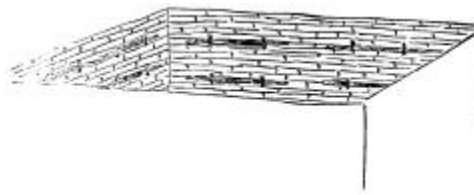


図6 石室内の折り釘と刀



図7 胄腐朽図 「車塚考証案」附図

国外では、武寧王陵の玄室に類例をみることができます。発掘の総指揮をとられた金元龍氏によれば、「各壁面には長さ15センチ程度の大型鉄釘が7・8箇所不規則に打ち込まれ、腐った木質のくっついている場合もあり、天井の真中にも1本うちまられていたようです。⁽⁶⁾その用途は不明なものの、「天井部のアーチを構築するときの足場用のもの、あるいは壁面の下部にだけめぐらされた装飾板用のものの可能性」が考えられています。⁽⁷⁾どうも雲部のものとは用途が違つようです。



ちよつと一息



衝角^{へきかく}という、軍艦の尖った触先をイメージしますが、衝角(ラム)とは吃水^{くすい}(喫水)線より下にあって、角のように突き出た部分があります。これで敵艦の船腹に突き刺し、沈めることを目的としていました。古くは古代ローマ時代のガレー船に取り付けられていま

した。近代では、1866年のリッザ海戦において、オーストリア艦「ウエルディナント・マックス」が衝角戦をしかけ、イタリア艦「レディタリア」を沈没させ、オーストリアが勝利した話は有名なようです。大砲の性能があがると、軍艦の衝角は消滅していきました。

本来の「衝角」という意味からして、形状も目的も違いますので、「衝角付舳」という名はおかしいということになります。



桃形兜

後藤守一氏は、早くから衝角という名に異を唱え、「戦国時代に「桃成」という兜があつて混同する懼れもあるが、舳をひっくりかえして見ると縁の輪郭が桃の実に近いことから「桃形式」と命名されています。(引用：三角板鋳留桃形式舳)

(注)現在の船舶の球状をした突起物は



バルバス・バウ(球状船首)と呼ばれ、造波抵抗を減らすためのものです。

*後藤守一「上古時代の舳」『月と剣道』27 1940年(『日本古代文化研究』所収 1942年 河出書房)

**瀧澤宗人『船のはなし』1991年 技報堂出版



『王者の武装』では、この鉄釘を「(ヤリガンナ)と鑑定しています(図8)。また、には「柄の痕跡がみられず、中央を境にやや錆の色に変化」があることから「半ば差し込まれていたことを示すの



図8 雲部車塚出土?
(右20.6cm)

かもしれないとしています。を刀掛けとして代用したのでしょうか。が貼り付

けてある板には、前述の八木氏の文が書かれています。出土遺物が京都大学に移管されたのが1901年、八木氏の論文も同年に書かれていますので、車塚出土のものとして信用できるでしょう。

3石

出土遺物の表にみられる「石」とは、石室床面に敷き詰められていたものです。詳細は不明ですが、試掘当時の新聞報道には「透明の海石」と書かれています。また、その他の当時の文献には「小石」、「玉子の如き丸い海石」、「鶏卵大の白き海石」と書かれています。これらのことから、白色の石英礫と考えられます。

西口陽一氏は、(大阪近郊では)兵庫県三原郡南淡町吹上浜を(大量で綺麗な)白石の産地と推定されています(図9)。

前回紙面の都合で書くことができませんでしたが、この小文を書くにあたり、西博孝氏を始め「考古文化研究会」の皆様のご教示をいただいております。特に中岡敬善氏には文献で大変お世話になっております。併せて感謝し、お礼申し上げます。

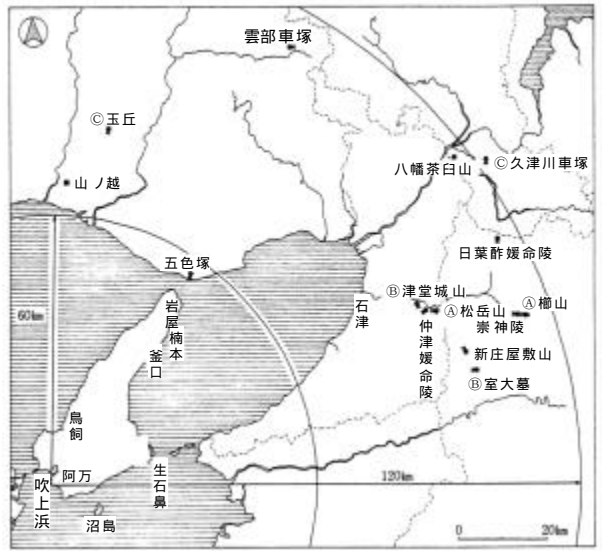


図9 吹上浜と白石出土古墳分布図

- A : 墳丘上撒石
B : 石室内敷石
C : 石棺内敷石

注

(12) 藤田和尊「古墳時代における武器 武具保有形態の変遷」『檀原考古学研究所論集』第8 1983年 吉川弘文館、「甲冑の保有形態」『月刊考古学ジャーナル』No.366 1993年 ニュー・サイエンス社

大量の甲冑(短冑・青・類冑)を有する場合の分類

『野中パターン』全て新品に近く、中期型甲冑セツトを基調としつつも、出土状況においてある程度セツト間の乱れを看守できるもの。百舌鳥古市古墳群の一部の陪塚に限って認められる。

『龜山パターン』新旧取り混ぜた組み合わせのもの。百舌鳥古市古墳群の周辺地域に所在する円墳で、粘土槨もしくはその簡略されたものを内部主体とする。

『月』の岡パターン』大量の甲冑セツトの寄せ集めの性格が強い。地方を中心に所在し、前方後円墳である。主体部に長持形石棺を採用する。

『鶴山パターン』後葉の甲冑を主体に短甲(挂甲を含む場合もある)(3領・

頸甲1・2個体 冑2鉢で構成されるもの。地方に所在する前方後円墳で在地色豊かな竪穴式石室を内部主体としている。

(13) 野上丈助編『論集武具』1991年 学生社 図版解説より

(14) 塚本敏夫『鉄留甲冑の技術』『月刊考古学ジャーナル』No.366 1993年 ニュー・サイエンス社

(15) 八木獎三郎「丹波国多紀郡雲部村の古墳発見品」『東京人類学会雑誌』第17巻第189号 1901年

(16) 金元龍「武寧王陵」1979年 近藤出版社

(17) 大韓民国文化財管理局編『武寧王陵発掘調査報告書(日本語版)』1974年 学生社

(18) 1897 明治30年4月7日付 東京朝日新聞

(15) の八木氏論文に全文が引用されているので、それによった。

(19) 注4 『軍塚一時』

(20) 注4 『高家正一』四道將軍丹波道主命御陵墓顛末記

(21) 注(15) の文献

(22) 西口陽一「石古墳 淡路」『考古学研究』第34号第2号 1987年

表1 『軍塚一時』より作成

表2 京都大学総合博物館『王者の武装―5世紀の金工技術―』1997年より(一部改変)

図3 末永雅雄『日本上代の甲冑』1934年 岡書院より

図4 笹間良彦『図録日本の甲冑武具事典』1981年 柏書房より(一部改変)

図5 表2に同じ

図6 注(15) の文献より

図7 多紀郡教育事務組合教育委員会『西山北古墳調査報告書』1997年 図版21(2)より

図8 表2に同じ

図9 注(22)より(一部改変)